

学校図書館専門職員養成に望む

Views from My Experiences as a School Librarian

鈴木紀代子

Kiyoko Suzuki

Résumé

A place of *shisho-kyoyu*, literal translation of which is a librarian-teacher, if more properly a teacher-librarian, has been very unstable in the educational system in Japan.

The writer of this article points out from her experiences as a qualified school-librarian major problems that hinder desirable development of school libraries as a whole; namely a total lack of interests of teachers in library materials other than prescribed textbooks and a lack of understanding of administrator about the role of the school library as a learning resources center.

序

I. 現場での経験

A. 最初の職場での経験

B. 次の職場で

C. 新しい職場で

II. 学校図書館専門職員の養成について

結び

序

今からちょうど10年前に、渡辺茂男氏は、「司書教諭論」¹⁾のなかで、司書教諭の定義、司書教諭の専門的職務と並んで司書教諭の養成の問題について論じておられる。それには現状の問題点とあるべき養成の姿とその具体的な私案まで含まれている。まず、現行司書教諭講習制度の問題点を次の4点から指摘している。

1. 講習制度になっていること。
2. 学校図書館司書教諭講習規定の附則第3項と第5

項を適用することによって、学校教育に結びつく専門的内容はなくなり、又、数年の経験だけで自動的に削ってしまう程度のものであること。

3. 単位および授業時間計算の基準をだしているがこの基準をどの科目に適用するかの指定がないこと。
4. 暫定的な措置と解釈すべき講習制度がなお存続していること。

そして、もし当分の間このまま講習制度が続くとすれば、科目や内容の検討を至急行う必要があるとし、その試案を示されている。さらに、本来のあり方として、大

鈴木紀代子： 田無工業高等学校司書教諭

Kiyoko Suzuki: Teacher Librarian, Tanashi Technical High School.

学における司書教諭の養成の必要を説かれ、その具体案を教職課程にある学生の場合と司書教諭専門課程にわけて、提示されている。そのなかで、最も重要視している点は、(1)児童・生徒用図書に関する広汎な知識と、(2)児童・生徒および教育課程と図書を結びつける能力、(3)基本的書誌的知識とそれを利用する能力を養成することである。

以上のような指摘がされているにもかかわらず、10年を経た現在も何ら変わっていない。そして、このような司書教諭の養成のあり方が、現在の学校図書館の停滞に決定的に影響していると思われる。このことは、この度、学校図書館の専門職員の養成に対する要望ということについて考えてみるために、自分の約10年間の仕事を具体的に検討してみて痛感したことである。私が最も重大なことで感じていることが、上記の3つに含まれていることで、1つは、資料に対する知識の不足であり、もう1つは、自分の図書館利用の経験の不足ということであった。これらの点について、今までの仕事を総括するなかで、逐次ふれてみようと思う。

I. 現場での経験

現在までのそれぞれ規模も性格も異なる三つの学校での経験を具体的に検討してみたいと思う。

A. 最初の職場での経験

まず卒業後初めて担当した図書館は、ある私立学校の図書館で、中学・高校・短大の共用の図書館の高校の部門であった。女子だけの一貫教育をめざしている学校であった。図書館の特徴としては、各階に一つずつ閲覧室がある3階建の独立の建物であるということである。当時全体で蔵書が27,500冊で、サービス対象は生徒・学生約1,500名、教職員140名であり、スタッフが4名であった。就職して1年間は、前任者の引継のためのメモをたよりに、日常の運営を大きな支障のないよう進めるのがせいっぱいであった。そして、1年後の春休みに、自分は何をしてきたのかをふと考えてみると、真に漠然としたものであり、自分の中に学校図書館のスタッフとしてやるべき仕事のイメージがはっきりしていないことに気づいた。何かを基に、それに照らし合わせて、自分の仕事を評価してみたいと思い、前記の渡辺茂男氏の「司書教諭論」を読み返してみた。そこで自分が特に明確なイメージのないまま、仕事を続けてきたことが、明らかとなった。そこで、いかに本来の仕事、任務を果せるようにしたらよいかを考えたとき、図書館全体として

仕事をどのようにしてきたのかを再検討する必要に迫られ、それをしてみることをスタッフの間に問題提起した。スタッフ全体の反省は、担当している実務が実際にどのように行われているか検討し、その後、「司書教諭論」に専門的職務としてあげられている項目について実務の実態と照合してみた。その結果主な問題点として次のようなことがあげられた。

(1) 技術的な問題

仕事が煩雑で、時間と労力の浪費が目立つ。

個々の仕事について担当者間の不統一な点が多い。

(2) 運営および諸活動の面

運営が計画的でなく、他律的である。諸活動が学校図書館として必要な内容をもって行われていない

(資料選択を教科に任かせている。利用指導が計画的に行われていない、など)。

これらの問題点について、当時の話し合いのなかでは、その原因として次のような要因を考えていた。

(1) 図書館の建物の構造上人手が普通以上に多く必要になっている点

(2) 人手の絶対量の不足

(3) 実務の内容について規定が明文化されていず、そのための時間と労力の浪費が多いこと。

そして、(1)と(2)については、学校全体の問題であり、スタッフだけではどうにもならない問題と考え、当面自分達ができることとして(3)について、スタッフの努力で解決していくことを考えた。その結果、実務の規定集²⁾を作成し、それに従って仕事を進めることで、仕事の内容を統一し、能率を高めて図書館本来の任務を少しでも多く果せるようにすることを第一段階と考え規定集の作成を始めた。

規定集は、大体次のような手順で作成された。

(1) 既に決っている規定の具体例を集める。

(2) 参考文献の検討

(3) 行っている仕事を列挙し、規定として必要な項目を整理・配列する。

(4) 各項目について、内容を細分化し、その手順を全員で確認しながら記述する。

(5) 記述された草稿を分担して読み、問題点を出し合う。

(6) 全体と部分の関連・問題点の解決、文章上・形式上の統一。

(7) 約65校の図書館を対象にアンケートし回答で得られた内容を問題点の解決のために役立てる。

- (8) 修正・補足された草稿を全員で確認し全体の構成を決定する。

このようにして実務規定が作られた。しかし、作成の過程で、いろいろな問題にぶつかり、未解決の問題として、次のような重要な問題が残された。

- (1) 現実の仕事手順を、そのまま規定とするにとどまり、その仕事の性格や価値などを検討したうえで規定することができなかった。
- (2) 規程に含まれるべき内容についての検討が不十分だったため、館の使命・目標長期計画、図書館員の職務、仕事の優先順序や重点、図書館員の保持すべき能力、職務組織や命令系統、各自の職務権限などについて明らかにされなかった。

その他、細かい記述上のことなどは、多く残されている。

この実務規定集の作成には、ほぼ2年8ヶ月の日数を費し、夏期休業中などには、スタッフが合宿して集中作業するなどのことまでしている。

確かにその後、この実務規定集は、スタッフが仕事をすすめるうえで、当初目的としたような不明確な点の確認の際などには役立っているし、スタッフの交代があった場合の引継は、より正確に行われるようになった。しかし、現在考えてみると、この規定集によって、相当量の時間が仕事のなかで短縮され、それによって他の活動が可能になったわけではなく、むしろ正確を期するために時間が長くなることも出てきたかと思われる。そして何よりも実務内容の統一と正確という以外に、仕事の質的内容は何等変らなかつたと云えよう。自分達の仕事が本来図書館がすべき任務とかけ離れてしまっているのではないかという疑問に答えるために始めた作業のはずであったが、規定集は、それには決して答えなかつたと思われる。

私達が必要としたことは、やはり、その学校における図書館の位置について、役割について検討し、それを果たすためにどのような仕事に中心をおくべきかを明らかにすることであったように思う。

具体的に述べるならば、次のようなことである。

この実務規定集では、例えば、図書原簿の記入に際して、各欄の記入の方法を3頁にわたって細かく規定している。このような詳細さは、実務のほとんどに亘っている。しかし、重要なのは、原簿が少しの乱れもなく統一して記入されていることではなく、何故図書原簿が必要なのか、当図書館として必要な記入は何と何であり、そ

れはどのように記入されていることが利用上必要であり大切なことなのかということを考えてみることであった。現に、従来一般に使われている図書原簿というものを廃止し、書店からの納品伝票で済ませている例がある。更にもっと重要な問題で閲覧用目録の問題がある。目録法については「NCR 65年版」によるとしながら、細かい部分を1つ1つ規定して統一をはかろうとしている。しかし、実務規定の作成の課程で、作成する目録が、書名目録と著者名目録だけでよいのかどうかについて一度も検討されていない。

このようなところに、学校図書館の専門職員の養成課程での図書館実務の偏重の影響が出てきていると思われる。

B. 次の職場で

次に担当した図書館は、公立の普通高校で新設校であったため、私が赴任したときは、図書室は廊下の隅の一角で、百科事典、日本文学全集、旺文社文庫他に数冊の図書と雑誌が数種入っているだけだった。6年を経た現在は、2教室分の図書室に約7,500冊の蔵書をもつ学校図書館になっている。1つの図書館を新しく作っていく立場に立ったとき、それまでの経験を基に私なりに方針を持って進めてきたつもりであった。

方針といっても抽象的なもので、かなり漠然としていたが、主に次のようなことを考えていた。

- (1) 整理・保管にのみ気をとられず、利用を中心にした動的な図書館にしたい。
- (2) 生徒が将来高校を卒業した後、公共図書館や大学図書館を自由に利用できる能力と習慣を身につけさせるため、図書館教育を充実させたい。
- (3) 教師集団のなかに積極的に入り、教育内容、教育上の問題点の理解に努め、教師の図書館に対する理解を深めることに努める。

ところが、現在その図書館を離れ、率直に反省してみると問題点ばかりであった。

いくつかの重要な問題点を整理してみよう。まず第1は、蔵書構成・資料収集の問題である。私は、「学校図書館基本図書目録」を中心に、基本図書の収集から始めていった。そして各教科へ推薦を依頼する形で、教科関係資料の充実を期し、その他の分野については、資料選択の tool のチェックをなるべく完全に行うよう心がけた。しかし、これでは全く不十分であった。先ず、「学校図書館基本図書目録」は、高校の部で総点数1,594点という範囲にとどまっているものであり、各分野の各論

的なものはほとんど含まれていないので、これでは最低限目録ともなり得ないと云えよう。東京都高等学校図書館研究会で数年前に行った調査では、高等学校の教育課程に必要な図書が13,000点あげられている。³⁾これは、各教科の教師の協力で必要な図書を具体的にリスト化しそれを集計した数である。そういう調査を基にするなり、独自に教科に協力を求めて蔵書構成の長期計画を持つべきであった。毎年予算の範囲内で、自由に推薦してもらうという方法では、系統性も計画性もなかったわけである。

次に前任校で必要性を感じながら実施できずにいた利用指導について考えてみたいと思う。ここでいう利用指導は、個別指導ではなくクラス単位で行う集団指導であり、簡単な指導計画を立て、ある年には1年～3年まで、ある年は1・2年で、ある年は1年生の間に全てが終るように時間配分して実施した。内容は、「高等学校の図書館」⁴⁾で扱われているような内容で、指導の方法として、講義をなるべく少くし、実際に作業してみることをなるべく多くするよう配慮した(新設校であったためか、一般に困難である利用指導のための時間を設定してもらうことは、比較的スムーズにできた)。利用指導についての実践を総括するためには、それだけで1つの論となると思われるほど様々な問題があるが、最も重要なことは、生徒の図書館利用の必要性・要求はあるのに、それに応じた形での利用指導になり得ず、司書教諭の側からの一方通行的な指導に終ってしまったということである。このような指導上の問題は、自分の図書館を利用した学習の経験の不足が基本的な原因になっていると思われる。又、1つには、教科教師が、生徒が図書館を利用して学習することに求めている内容が曖昧であったり、安易であったりすること。一方、図書館の方では、生徒の実態の把握や教師との連絡が不十分なまま、図書館で学習するにはこれだけの指導が必要なはずという独断で、指導を行ってしまっているということが主な原因と考えられる。

その他いくつかの反省される点をあげてみよう。

(1) 閲覧目録の作成について

作っていたのは、事務用と兼用の配架目録、著者名目録、書名目録で件名目録も分類目録も作成しなかった。

労力その他の条件はあるにしても、生徒の利用上、レファレンス活動上、やはり不便を感じるものが多かった。

(2) 利用者への接触が不十分であった。

これは具体的で実証的な問題ではないが、資料の整理や庶務的な仕事に追われて、カウンターや閲覧室に出ることに消極的だったと思われる点である。

(3) 学校のなかでの図書館や司書教諭の位置について、一般教師の理解を深めることができなかった。

利用指導の部分で述べたように、利用指導を行うために授業時間をさいてもらうことは比較的スムーズにできた。しかし、それは内容の理解や教師自身にその要求があつてのことではなく「良いことだから」という程度の認識によってであったように思われる。そのような図書館への関心の低さは、日常の運営や資料の選択の際の司書教諭へのお任せ主義によく現われている。こういうなかでは、もっと具体的な方法で教師と連絡をとったり、具体的な問題提起で話し合いを広めたりする努力が必要であった。

図書館や司書教諭に対する要求の薄さは、私の転勤に際し、時期的なことや、司書教諭の採用試験を中止している現状などの事情はあるにしても、後任に専任司書教諭をという要求が高まらなかったことに如実に現われている。

C. 新しい職場で

次の職場での問題はまだ転任したばかりなので自分の経験ではなく、引き継いでみて気がついた問題である。この学校は、創立後約10年の工業高校である。

正直なところ、私は約10年間の仕事の経験を発展させたい気持ちで転任したのであったが、実際には、あたかも振出しに戻ったかのような感である。何故なら、専任の司書教諭がいて、更に数年前からは学校司書が1人加わって仕事をしていたにもかかわらず、閲覧用目録が何も作られていないことをはじめとして、多くの問題が山積されていたのである。以下そのうち重要な点だけを述べて、学校図書館のスタッフの問題との関連を考えてみたいと思う。

まず第1は、閲覧用目録がないことである。しかも、事務用の配架目録が作られていたが、その編成がバラバラで蔵書の検索にも、確認にも役立たなかった。そのため、利用者から資料の所在について質問を受けても確かな回答ができず大変困ってしまった。

次に資料の配架についての配慮が不足していて以下のような状態であった。

参考図書は別置されているものと、一般書と共に配架されているものがあり、その規準が不明で探しにくい

こと、大型の参考図書が6段書架の最上段にもあり、利用上大変不便であること、配架の順序が請求記号順になっていない部分が多く、配架の誤りがおこりやすく、又探しにくいこと。

さらに、教育関係資料のうち多くのもの、ガイドブック、雑誌のバックナンバーの全てなどが司書室に別置され、事実上閉架の形になっており、その所在を知る者にだけ利用に供されている。

又、教科関係資料の選択は、各教科にまかされており、その大部分が、各科の準備室に長期貸出の形で置かれている。それらの資料のほとんどを生徒は利用できない。

その他、目録の記入上の不統一、蔵書点検の結果の不明確さと蔵書統計の数字上の不一致、紀要等の教育関係のパンフレットの未整理分の堆積などがあって、全て改めて資料の整理標準を決めて仕事を始めなければならなかった。

利用指導は、新入生に簡単な利用案内のプリントを配って1クラス1時間実施されるオリエンテーション以外に、集团的・組織的には行われていなかったようだし、教科との協力関係は、資料の選択の際だけであったようである。

一方、いろいろな資料を整理してみると、数年前までは、教育関係資料のコンテンツサービスが行われ、件名索引が作られていたようであり、テーマ別の資料の紹介リストを生徒に配布していた。

このように、基本的な資料の収集・整理や検索手段の整備・利用者へのサービスが曖昧なまま行われ、一方教師への総合的な教育関係資料のコンテンツサービスなどの手数料のかかるサービスが行われるという不均衡が、何故起るのだろうか。

その基本的な原因として、学校図書館のスタッフのなかで、学校図書館が基本的に備えているべき機能が何であり、そのために先ず行わなければならない仕事は何なのか、ということが明らかになっていないということがあげられると思う。

以上、各職場での経験と感じたことを述べてきたが、学校図書館の職員の養成の問題として特に重要と思われるのは、やはり、前述の渡辺氏が指摘しておられる3つの点なのである。

II. 学校図書館専門職員の養成について

まず第1に、資料に対する知識を広汎に、しかも組織

的に持てるような教育が必要である。

現在の司書教諭の講習のなかには、資料に関する科目は、「図書の選択」1単位のみである。1単位の科目の中でどれだけ組織的に資料についての学習を行い得るだろうか。実際にどのような内容で授業が行われるかは不明だが、講習の形を整えるために設けられているに過ぎないように思える。渡辺氏は、当面の講習内容の改善として「学校図書館資料論」を加えることを提案しておられるが、それはあくまでも暫定的な措置と考える。ある研究会の席上、それぞれが資料についての学習をどのようにしたか問題になったときがあるが、そのとき、私達が慶応の図書館学科で受けた「資料情報調査」「和漢資料」「人文科学資料」「社会科学資料」「科学技術資料」「児童青少年文献」などの科目が是非必要であることが話し合われた。もちろんこれらの科目の学習のなかには、実習的な面も含まれるものと考えるが、資料についての知識を広汎にしかも組織的に得るためには、一つの分野について、基本的な資料はもちろん、広汎な資料を網羅することを要求するような課題に基いての研究・訓練が必要と考える。

次に、教育課程と資料を結びつける能力についてであるが、この点について、アメリカの学校図書館基準⁵⁾では、「(a) 学校の運営管理、(b) 学習の原理、(c) 教育課程、(d) ガイダンスとカウンセリング、(e) マス・コミュニケーションの科目を修得すべきであり、さらに教材資料に適用される調査研究法の実践的な知識を身につける」としている。このように養成の過程での教育に関する指導の充実が必要であることはもちろんであるが、この点については現在の教育の問題について、特に教育課程や教育内容について、図書館関係者も自らの問題として考えてみなければならない大きな問題があると思う。

既に10年前に、国分一太郎氏は、「学校図書館の進展を阻む四つの要因」と題して、現代教育のゆがみについて問題を指摘しておられる。⁶⁾

事物の真理・人間の真実へのあくことなき追求をさせることが学校教育そのものであった戦後の新教育の中でこそ、方法論としての学校図書館の重視ではなく、子どもたちの文化的活動そのものとして重視されたのであったが、その教育の方向が、朝鮮戦争前後から変ってきていること。そのことが学校図書館の活動の停滞の根本的な原因とみておられる。中教審の最終答申が出され、小・中・高と教育課程の改訂がなされてきた現在、この傾向はますます強まったと考えられる。それは、少しの選

択の余地もない時間割で、生徒を完全にしぼりつけ、教科内容も3分の1の生徒が理解できない程の高度なものの詰め込みとなっている状態である。その上、受験準備体制の強化は、現場の教師に教材を自由に選択し、生徒が自主的に資料に当って学習するような方法を授業に取り入れる余地を全く残していない。このことが、前述のように、例えレポート提出を求めるような授業が行われた場合でも、それに求める内容が安易なものであったり、ただ形式的に提出させるだけに終わってしまうという現状を生み出している。教育・教育課程の実情がこのような状態にあっては、図書館員がいろいろな方法で資料を準備しても、一人相撲のようなものとなる。

7月初めに出された教育制度検討委員会の第三次報告⁷⁾では、教育内容について主に述べているが、そのなかで教育課程編成の視点の1つとして、「個別的な教科学習や諸活動で獲得した知識や能力を総合して可能な限り現実的問題についての追求や社会的行動に役立たせるような総合学習を展開すること」として総合学習の重要性を述べている。又、高校の段階では、「とくに授業の形態・方法において、ゼミナール方式を採用したり、また自主的なフィールドワーク・資料検索などによるレポートの提出を奨励するなどの工夫によって、学習をつめこみでない生彩のあるものにすべきである」としている。このような問題提起と改革の方向に、図書館員自らも参加することによって、真に学校図書館活動を行える教育の現場をつくりだすことができるのではないだろうか。

教育課程と図書館活動を結びつける問題として、もう一点は、学校図書館の専門職員にとって教科指導の経験が必要かどうか、ということがいつも我々の間で問題となる。

アメリカの学校図書館基準では、教材専門員の基礎的能力を修得するのに最も確実なよりどころの第1点として、次のようなことをあげている。「豊かな教育経験。教材専門委員は、まず経験をふんだ教師である。この経験は、何年かの学習指導ないし経験がなくてこの職につく場合は、全課程の修了に引続いて行われる組織的な実習を終えていなければならない。又、教育課程委員会委員の経験を経ていること、および、ガイダンスと管理に関する経験をもっていることが必要である。」

又、オーストラリアのメルボルン教育大学図書館学科チーフディレクターのグレーム・コー氏によると、オーストラリアでは、司書教諭は専任の学校図書館スタッフ

となる前に、2・3年のあいだ教科教師として教壇に立ち、教科教師としての実績をつむことを義務づけられている。⁷⁾確かに、教育の中での図書館活動を十分に展開させるためには、教育課程・教育方法などについての理解が充分でなければならないと思われる。しかし、コー氏との懇談の席上でも出された疑問だが、教科の教諭の場合には最初から希望教科の教師として教壇に立てるので、一種の差別ではないか、又、他教科と並ぶ図書館科というイメージと矛盾するのではないかという問題がある。もっとも懇談のなかで明らかになったことであるが、オーストラリアの場合も、学校という社会の中で、教科指導の経験があった方が、生徒に対しても、教師間の連帯のためにも良い状態にあるので、その経験が必要とされているという事情もある。

第3の問題は、基本的書誌的知識とそれを利用する能力についてであるが、この点について次の例は、アメリカの徹底した図書館利用の習慣を示すと思われる。土山牧民氏がアメリカ博士資格試験での「図書館をフルに活用して以下の諸問題の中から一つ選び、その問題を解明するための資料となる文献のリストを作成せよ」という課題に出会った経験を述べておられる。⁹⁾このことは、そのような課題が課されるくらい図書館資料の利用に習熟していることおよび書誌的知識を持っていることが当然とされているということだと思う。そして、プリンストンやノースウェスタン大学の図書館での新入生に対する親切的な図書館利用の指導についても触れておられるが、このような大学における学生全体に対する図書館利用を前提としての学習研究の積み重ねと習慣化が、図書館員の養成の一つの基礎として重要なのではないだろうか。

結 び

最後に、現在図書館員の専門性の問題が図書館界全体で大きな問題になっているが、このことに触れておきたい。

日本図書館協会の図書館員の問題調査研究委員会では、この問題を各種図書館の立場から検討を続けている。学校図書館の場合については、学校図書館法の改正運動との関連ででてきている「誰でもよいからまず専任者を」という傾向を批判して、「現状から云ってさえ、学校図書館は、教諭(兼任)の指導のもとに事務職員(学校司書)が運営するという形態ではなく、直截に司書教諭(司書コースの専修者でかつ教師としての有資格者)

によって運営されることが望ましい。いいかえれば、学校図書館の正規のスタッフは、司書としての専門性を身につけた教師（教員免許状取得者）であることが望ましい」としている。¹⁰⁾そしてそのための「学校図書館科」専修教諭（司書教諭）の養成を制度的に保証する措置が、この問題の解決の要件をなすものと提起している。

又、日本図書館協会の学校図書館部会は、1970年8月に部会として発足したが、その後1971年の夏期研究集会では、次のような報告がされている。「図書館科教諭の創設を」¹¹⁾と題する報告のなかで、広松邦子氏は、学校図書館の現状・学校教育の今後の方向などとの関連から、次のように述べている。「今日では学校図書館、少くとも高校図書館は、もはや課外読物や事典類の単なる書庫ではなく、参考業務の比重が大きくなっており、さらに教科プログラミングへの参画、利用指導の実施などが課せられている」現状のなかでは、「機能上の分業は必要ですけれども二人のスタッフが実質的に同じような仕事ができなければなりません」とし、一方が事故の場合などのためではなく、早晩「利用指導その他の“高級”な業務が一人の職員だけではまかないきれなくなるという見通しを実感的にもっている」¹²⁾と述べている。「そして単に教師有資格者の複数制ということにとどまらず、他教科の教師と同資格の図書館科教諭として、資質（養成課程）のうえでも、資格（教員免許）のうえでも“専門性”をそなえることが、当然の要求になると思います」と図書館科教諭の創設を提起している。

私も図書館学を専修した教諭の養成ということが学校図書館の専門職員の養成という問題を解決していく道であり、そのための制度的な保証を早急に要望する者です。

そして、暫定的措置であるべき講習制度がまだ存続している日本に比べて、前述のコー氏によれば、「学校図書館スタッフとしてはどんな人が必要かという見地から

出発し、それに見合う養成制度を大学に設置した」オーストラリアの学校図書館行政に見習うべきだと思う。

- 1) 渡辺茂男. “司書教諭論”, *Library science*, no. 1, 1963, p. 39-56.
- 2) 恵泉女学園図書館. 恵泉女学園図書館実務の手引. 1968.
- 3) 東京都高等学校図書館研究会年報. no. 8, 1968, p. 50.
- 4) 東京都高等学校図書館研究会編. 高等学校の図書館. 東京, 日本書院, 1965. 111 p.
- 5) アメリカ・スクールライブラリアン協会. アメリカの学校図書館基準. 東京, 全国学校図書館協議会, 1966. p. 86.
- 6) 国分一太郎. “学図の進展を阻む四つの要因—現代教育のゆがみとマス・コミの攻勢”, *学校図書館*, no. 150, 1963.4, p. 10-13.
- 7) “日本の教育をどう改めるべきか(統編)—教育制度検討委員会第三次報告”, *教育評論*, no. 293, 1973.7.
- 8) “オーストラリアの司書教諭制度に思う—G・コー氏との懇談会に出席して.” *図書館雑誌*, vol. 67, no. 7, 1973, p. 299-300.
- 9) 土山牧民. “図書館員の真価,” *図書館雑誌*, vol. 67, no. 7, 1973, p. 289-90.
- 10) 図書館員の問題調査研究委員会. “学校図書館一職員制度の現状と課題,” *図書館雑誌*, vol. 65, no. 12, 1971, p. 643-4.
- 11) 広松邦子. “図書館科教諭の創設を一学校図書館スタッフの養成をめぐる,” *図書館雑誌*, vol. 65, no. 11, 1971, p. 568-9.
- 12) 教育のあり方が変わり、第三次報告で述べられているような総合学習が、自主ゼミナール方式などを取り入れて行われた場合、学校図書館に何が要求され、学校図書館活動がどのようなものとなり、そのためにどんな資質を持ったスタッフが必要とされるかについて、いわゆる高校紛争後の都立上野高校の例を司書教諭の座間有敬氏が報告しておられる。座間有敬. “授業改革と学校図書館,” *図書館雑誌*, vol. 65, no. 12, 1971, p. 639-40.